

## 酒井良男先生の思い出

小島賢治

先生は専門違いの私にとっては、いつも災害科学の酒井先生であった。特に1983年度から自然災害科学総合研究班の雪氷専門分科会幹事の役が私に廻ってきてからは、北海道地区の幹事会、全国の研究連絡会議等で先生と同席する機会が多くなった。1960年頃いろいろな分野の人々が集って災害科学研究が組織化された当初から、先生はその発展に並々ならぬ情熱を傾けて居られたことは承知していたが、専門幹事として先生に接することが多くなってから、先生の災害科学に対する熱心さにはますます深い感銘を覚えた。先生の主導による地区部会または資料センターの活動にはいくつか特筆すべきものがあるが、それとは別に、1983年に札幌で催された自然災害科学第20回（記念）総合シンポジウムはひとつのクライマックスと私には感じられた。先生の発案により各専門分科会の幹事がそれぞれ「現状と将来展望」について講演し、これをまとめて約90頁の報告として印刷出版する作業を先生は丹念に進められた。私にとっては、報告の出来不出来は別として、大いに勉強になったし、何度もセンターに先生をおたずねして時には雑談が長くなったのも思い出のひとつである。

先生の永年にわたる努力にもかかわらず、自然災害科学「特別研究」批判の動きが中央で出てきたのもこの頃からではなかったかと思う。昭和47年度から文部省科研費の中で「特別研究」として（それ以前の特定研究にひきつづき）いわば無期限で配分が続けられた災害科学研究費を、期限つきに縮小変更すべきとの議論が研究費配分にかかわる審議会（？）等に現われ、総合研究班の本部代表、幹事、その他の主な委員は対策にたいへん苦勞された。そのために何度も開かれた会議に酒井先生も地区部会長として先生独得の議論を展開されたであろうことは平幹事の私にも想像された。時にはそれが会議の流れに逆行する場面もあったかも知れない。無期限と云えば、総合研究班の組織内にも例外として目立つことがひとつあった。各種委員会委員、幹事、地区部会長等およそ50人はみな任期3年で人または役目を交替したが、酒井先生だけがあたかも無期限のように留任を続けて居られた。先生御自身もそれを気にされて、時折「居座り災害」などと表現されていた。それやこれやで結局、それまでの自然災害特別研究が廃止されて新たに「重点領域研究」に移行することが確定的となった頃、1986年9月に先生は地区部会長と資料センター長の役目を退かれ、その後しばらくは先生がセンターの事業のひとつとして手がけた「道内の災害写真（スライド）」の整理等のために資料センターに時々通われたと記憶している。

それにしても、酒井先生が司会をされた当時の冬の幹事会の寒さは忘れられない。おそらく先生自身は熱心に話を続けて居られたので、室の寒さを感じなかったのであろう。当時「異常低温云々」という題の研究があって私も参加したことがあるが、私は冬の資料センターこそまさに異常低温ではないかと心の中でつぶやいた。私の幹事の任期が切れた後も地区幹事会には出るよう先生から厳命され、お役に立つならとなるべく出席するようにしたが、幹事会と云っても旧委員や前幹事などばかりが多い淋しいものであったことも稀ではなかった。そのうちにセンターの運

営費が打切られて先生のご苦勞の種がそこでまた増えた。私自身も定年でOBとなり、それから5年ほど経った。

最近では資料センターの経費も正規に復活し、災害科学の研究も新たな形で活発に行なわれていることを、酒井先生は私共の届かぬ所からごらんになって喜んでおいでになるのではなかろうか。

(こじまけんじ：北海道大学名誉教授)

## 酒井良男先生と災害科学研究

若 濱 五 郎

自然災害の研究が総合的かつ組織的に文部省・大学にとり上げられたのは、周知の如く、昭和34年9月、伊勢湾台風がもたらした大規模な風水害がその契機になった。当時、福井大学学長であった長谷川万吉先生の主導の下、現在の自然災害科学研究のさきがけが開始されたが、先生の脳裏には、戦中、戦後にかけて頻発した地震、台風等による大災害——昭和19年の東南海地震、同20年の三河地震、同22年の南海道地震・津波、同23年の福井地震、又は、戦後、本土各地を襲った枕崎台風、キャスリン台風、アイオン台風、ジェーン台風等による大風水害があったに違いない。当時、東京大学工学部の大学院にあって建築工学の研究をされていた若き日の酒井良男先生が、後年、地震工学、耐震構造、さらには広く自然災害の基礎研究を推進されるようになったのも、このような背景があったのであろう。

昭和35年、特進研究として始められた文部省自然災害科学研究は、その後、特定研究、更に特別研究へと発展し、現在の重点領域研究へと継続されている。話はやや脱線するが筆者が主に関係してきた雪氷災害は、その初期の昭和38年1月下旬に北陸地方一帯を襲った所謂「三八豪雪」がその契機となって自然災害科学研究に取り込まれた。三八豪雪の突発災害調査に筆者も参加したが、当時、低温研所長であった吉田順五先生の下、長岡、富山、福井等を約ひと月かけて巡り、豪雪災害のひどさを身を以て知ったが、その間、福井では、長谷川万吉先生や塚野先生にもお会いした。両先生はわれわれに雪害研究の重要性をのべられ、その推進を要請されたことを今でもはっきりと思い出す。

その後、自然災害科学の研究が、どのように組織され、どのように運営されてきたかは、当時、一介の若手分担者として実働部隊にあった筆者にはよくわからない。知っていることといえば北海道に地区部会がおかれ、吉田順五先生、村井延雄先生、田治米鏡治先生といった大先生が地区部会長として活躍して居られたことくらいである。酒井良男先生は昭和41年にその後をつがれて地区部会長に就任され、以後、18年半の長きにわたり、北海道における自然災害研究の総師として、又、全国の総合班の幹部メンバーとして災害研究のリーダーシップをとってこられた。その頃、筆者は時々、北海道地区部会主催の研究会に出席して、遠くから先生のお姿に接したが、先